

第11回電気絶縁材料シンポジウム

開催にあたって

絶縁材料常置専門委員会
委員長 家田正之

第11回電気絶縁材料シンポジウムは秀麗な富士を眼前にみる箱根地区において、永年の願望だったホテル合宿形式をもって開催することになりました。ここに絶縁材料常置専門委員会の委員・幹事諸氏の御努力と電気学会内の関係各位、とくに電気材料技術委員会（委員長 成田賢仁氏）および絶縁材料耐熱性試験法（前委員長 吉岡 浩氏、現委員長 金子 剛氏）、絶縁材料コロナ劣化（前委員長 岡本英夫氏、現委員長 金指元憲氏）、絶縁材料耐電界性（委員長 能登文敏氏）の各常置専門委員会、元 絶縁材料放射線試験調査専門委員会〔現 原子力発電所用電線・ケーブル調査専門委員会〕（委員長 矢作吉之助氏）などの御協力と電気学会事務局の御尽力に対して、厚く感謝の意を表するものであります。

本シンポジウムが昭和43年第1回を開催して以来、その目的とする所は一貫してわが国の電気絶縁工学に対する学問、技術の質的向上とそれらの有機的結合の強化、学際領域にある絶縁工学に対する電気、物理、化学、情報などの専門家による総合工学の確立、海外招待講演者との情報交換を通しての国際性の向上、更に若手研究・技術者の育成というものであります。これら目標は過去10回のシンポジウムを通じて学会内外において理解され、本シンポジウムの意義と使令が定着され、その成果も次第に認められつつあるものと確信しております。

本年も4部門にわたり、優れた47件の論文が応募採択され、質的にも量的にも国際的に充分評価しうる多くの発表が期待されております。また関連専門委員会より4件の貴重な技術活動報告がよせられました。発表形式に対しましては、昨年の試行で好評をえたポスターセッションと論議の集中化と採択論文数の拡大をねらった2会場パラレルセッションを引続いて導入し、その成果の定着化をはかると共に、何んといっても今年最大の特徴はホテル合宿形式による会場の設定であります。これは従来とかく物足りなさを感じておりました会議参加者間の情報交換と親睦の不足を解決する一手段として注目されてきたもので、永年の願望を達成したという感じであります。

本年も委員会において慎重に審議した結果、外国人招待講演者として、フランス国中央電気研究所、CIGRE・SC-15（絶縁材料）委員長として活躍されておりますFallou女史と学術振興会招へい教授として来日中の西ドイツ国ハーンマイトナー研究所、液体電気物性の著名な学者であるSchmidt博士の両氏を迎えることが出来ました。御多忙のなか本委員会の招待を御快諾下さった両氏と種々御尽力いただいた関係各位に改めて厚く御礼申し上げます。

御承知のごとく厳しい国際状況のなかにあつて、わが国の学問及び工業技術の直面する課題の解決には多くの困難があると存じます。この中でわが国の電気絶縁工学の学問と技術の果す役割にも多くの課題と反省が山積しています。特に後進性を脱した独創的な面に対して、果たしてどの程度の国際的評価をうる事が出来るかなど難かしい問題があるように思われます。

このような環境下で、本シンポジウムが、電気絶縁工学の学問および技術における質的

向上に対して、いささかでも役に立つことを期待するものでありますが、参加者各位におかれましても、会議運営方式を含めた委員会の主旨を御理解いただき、会議を通して積極的に意見交換に参加され、またアンケートを通して、今後の会議運営に関する忌憚のない御意見をよせられ、これらを参考として、より有意義な会議に成長することを念願しております。

第11回シンポジウム開催に際して、種々御尽力された絶縁材料常置専門委員会の委員氏名は下記の通りであります。

〔幹事〕 日野太郎、田中祀捷

〔委員〕 犬石嘉雄、岡本英夫、河野照哉、齊藤省吾、蓬郷章郎、中北倫男、永野宏郎、能登文敏、平林庄司、松葉博則、松浦清、宮下隆雄、矢作吉之助、山田有十

〔参加〕 阿部伸一、相原貢、一色節也、井関昇、金指元憲、堺孝夫、武祐一郎、内藤克彦、西松峯昭、福田正、藤田英夫、森内孝彦、森山寛厚、吉岡浩

〔幹事補〕 新田義孝

また外国人講演者招待に御協力頂いた下記の関係各社に厚く御礼申し上げます。

昭和電線電纜株式会社、住友電気工業株式会社、

タツタ電線株式会社、大日本電線株式会社、

帝人株式会社、東京芝浦電気株式会社、

株式会社 巴川製紙所、日新電機株式会社、

日東電気工業株式会社、日本碍子株式会社、

株式会社 日立製作所、日立電線株式会社、

富士電機製造株式会社、藤倉電線株式会社、

古河電気工業株式会社、松下産業機器株式会社、

三菱電機株式会社、株式会社 明電舎

(五十音順)

ポスターセッションとは

今回9件の発表がポスターセッションとなっています。

これは発表者が、主要な研究成果のビラを用意し、それぞれ関心のある小人数の参加者の前で質疑応答を中心に研究発表するもので、参加者と発表者が深く討論出来ることを特徴としています。奮って討議に参加されることを切望します。